

電車内の迷惑行為に関する研究

— 私的 - 公的空間意識と迷惑行為との関連 —

The study about annoying act in the train.
- The Relationship with a awareness of personal space and public space -

小嶋理江¹⁾

Masae KOJIMA

北折充隆²⁾

Mitsutaka KITAORI

【問題と目的】

本研究の目的は、ある空間に対する私的あるいは公的空間としての意識が、迷惑行為に対する評価や実際の実行程度などに影響があるか、電車内を想定した質問紙調査によって検討することである。

公共スペースは、自宅や車の中と異なり、無数の見知らぬ人同士が集まる空間である。それ故、互いの欲求に従った行動を押し通せば、他者が不利益を被ったり被害を受けることとなる。そこで、こうした利害関係を調整し、相互の利益をはかる形で行動を規制する必要が生じてくる。このような規制は、一般に社会規範と呼ばれる (Humphrey, 2006; Moriarty, 1974)。特に、軽微な逸脱行動の中で、「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることで、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為」と定義されるものは、社会的迷惑として、近年研究が進められている (吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折, 1999; 吉田・元吉・北折, 2000など)。例えば、森・石田 (2001) は、電車内での携帯電話の使用に関するルールが定着するプロセスを明らかにしている。

彼らはその中で、“迷惑”と主張される背景に、社会的合意を支えに自らの不快感に対する正当性を認め、そうでないケースを排除しようという心性の存在を指摘している。

正当性の主張に関連し、例えば北折 (2008a) は、電車内での様々な迷惑行為に関する評価について、「悪質だ」「空気が読めない」「見苦しい」「迷惑だ」「無神経だ」といった評価間の関係について明らかにしている。1999年の公共広告機構によるCM“ジコ虫”が、日本新語・流行語大賞トップ10に入賞した。この中でも“化粧に励む「メイク虫」”や“荷物で座席を占拠する「バショトリ虫」”などが取り上げられ、これらの行為が電車内の迷惑行為として強く認知されていた。北折によれば、「足を大きく広げて座るなど、座席を一人で大きく占領している」行為は、極めて“悪質で空気が読めず、見苦しくて迷惑で無神経である”と評価された。しかし、「携帯電話でメールを打つ」行為は、ほぼ全ての項目について高い値を示さず、ペースメーカーへの悪影響 (松田, 2002) などが騒がれた、使用規制の流れに逆行するものであった。また、「電車内での飲食」「電車内での化粧」は、迷惑や悪質とは評価されず、“見苦しい”という評価のみ突出していた。電車内での飲食

1) 金城学院大学人間科学部非常勤講師

2) 金城学院大学人間科学部多元心理学科

や化粧は、森らの主張する不快感への正当性のみが反映された行為といえよう。すなわち、場所を占領する行為は、他の乗客が座れないといった不利益につながるが、電車内での化粧は実害が及ぶことはない。吉田ら(1999, 2000)の定義に基づけば、電車内の化粧は明らかな迷惑行為であるにも関わらず、行為者が「誰にも害が及んでいない、何が悪い」といった主張に陥りやすい原因の一つであろう。一般に、不快感情を顔に出すことは社会的に望ましいとされていないため、周囲は見て見ぬ振りをする。これが、他者の行動を正しい行為の指標とする社会的証明(Cialdini, 1988; 北折・吉田, 2004)の原理として作用し、結果、不快感情を露わにすることはしない。それ故、行為者は他者の不快感情を汲み取ることが困難となり、迷惑なことをしているという実感を持つことができなくなると考えられる。

このような背景を踏まえると、電車内で飲食や化粧行為をする人は、しない人と比較して、次の二点の認識が異なる可能性が考えられる。一つは、共感性などが低いいため、他者の感情を把握するスキルが乏しいことである。もう一つは、個人の持つ空間意識の違いである。

これまで共感性は、主に迷惑行為に関する一連の研究の中で独立変数として投入し、検討されることが多かった(e.g. 小池・吉田, 2005; Koike & Yoshida, 2006)。例えば、一対一の人間関係における迷惑行為を検討した小池・吉田(2005)では、共感性の高い者は、相手が迷惑認知をする可能性が高い場合に行為を抑制した。一般に、他者の視点に立ったり、相手の不快感を自分の中で経験できれば、迷惑とされる行為をする傾向は低くなる。ここでいう共感性とは、小池らの指摘にもあるように、「相手の立場に立って物事を見て、相手を理解すること」(e.g. Dymond, 1948)、および「相手の感情と同じものを自分の中で

経験すること」(e.g. Stotland, 1969)である。

もう一つの空間意識とは、ある個人が、自分の置かれた空間を私的なもの、または公的なもののどちらに近いのかと意識する傾向をさす。例えば電車内での化粧行為は、会社や学校には、化粧をした状態で行きたいというのが主要な理由と推察される。会社という公共空間に化粧をしない状態では行けないという認識であろう。それは、電車内での化粧行為に対して抵抗を感じない人は、電車の中を私的空間の延長と意識しており、それが化粧に対する抵抗を低めていると解釈することができる。一般には、電車内は無数の見知らぬ人が乗り合わせるため、公共空間とみなすのが自然であろう。そして、公共空間という認識が強い人ほど、化粧行為に対して公共の場で迷惑であると不快な印象を抱きやすいことになる。これは化粧だけでなく、座席の占有や携帯電話の使用など、迷惑行為全般に同様に当てはまると考えられる。つまり、電車内の空間で自分の部屋のように振る舞う人であれば、荷物の置き場所を配慮するようなこともないであろうし、携帯で話をすることに対して抵抗を感じることもないと予測できる。こうした空間認識の違いを明らかにすることは、迷惑行為の性質を解明する一つの指標となると考える。

ところで、これまで電車内の迷惑行為は、社会心理学の社会的迷惑の領域での検討が多く(吉田ら, 2009)、行為者から受ける不快感や対処方略などが主な対象とされてきた。しかし、迷惑行為者の特性や空間意識に着目することで、社会的環境における迷惑行為の本質を明らかにすることが可能となろう。それを踏まえ、乗客のマナー違反、ルール違反は時として、列車の運行を妨げる要因となる可能性もあるため、交通心理学的観点から検討し、交通安全教育や啓発キャンペーンなどに

応用していくことは一定の意義があろう。

本研究では、空間意識が迷惑行為の評価に及ぼす影響について検討することを目的とし、迷惑行為の目撃者、行為者のどちらの当事者にもなりやすい、電車通学を手段とする大学生を対象とした調査を行なった。私的・公的空間意識が迷惑行為に対する実行程度、格好悪さ評価、迷惑認知に及ぼす影響について検討するため、本調査では女性特有の化粧行為だけではなく、他の迷惑行為にも焦点を当てた。

【方法】

調査対象 男女のデータを取得するため、私立K女子大学および私立A工業大学で調査を実施した。女性は209名（平均年齢19.33歳， $SD=0.98$ ），男性は184名（平均年齢19.45歳， $SD=1.23$ ）である。このうち、「あなたが普段利用している鉄道について選択して下さい」との質問に回答しなかった男性8名、女性2名は除外した。

実施時期 両大学ともに、2008年12月である。調査用紙は授業時間中に配布し、その場で回答を求めた。

調査項目 公-私空間の測定項目作成のため、予備調査として、心理学専攻の学生数名で、「朝起きてから学校に来るまでで、自分が直面する場面」を挙げてもらい、加えて公共の場所か私的空間か意見が分かれない場所について挙げてもらう形で24カ所を設定した。それに対して、「以下にあげる場所はあなたにとって、公共空間とプライベート空間のどちらに近いですか？あてはまると思う数字ひとつに○をつけてください」と教示し、「自分にとって完全にプライベート空間である」から「自分にとって完全に公共空間である」の7件法で回答を求めた。

電車内の迷惑行為については、北折（2008）

の中から、迷惑だという評価が高かったものを中心に、10の行為を抽出した。そして、それらの行為を多面的に評価するために、それぞれの行為について、「全くやったことがない～日常的にやる・やっていた（実行程度）」、「全く恥ずかしいとも格好悪いとも思わない～極めて恥ずかしくて格好悪いと思う（格好悪さ評価）」、「全く迷惑だと思わない～極めて迷惑だと思う（迷惑認知）」のそれぞれの観点から5件法で評価した。

【結果】

空間意識傾向の分類 24項目それぞれについて、各数値に回答した人数をクロス集計表にまとめ、 χ^2 検定を実施した。セル内に5以下の数値がある場合、フィッシャーの直接確率検定を実施した。その結果、全ての場面について0.1%水準で偏りが見られた（Table 1）。この結果より、多くの場面が公共空間・私的空間のどちらかに偏る傾向があり、天井効果や床効果を示していた。ただ、それでも全ての項目において、一定数は多数派と逆の回答をしているため、「空間意識傾向」とし、分類することとした。分類には、潜在ランクを用いた。一般的に行なわれる連続尺度上における群分けに対し、潜在ランク（latent rank）は順序尺度上で段階評価するものである（Shojima, 2007）。連続尺度上における1点の差が意味のあるものなのか分かりにくい点を考慮し、順序尺度上で各受検者がどの潜在ランクに所属するかの確率を算出する手法である。

想定した空間24項目を用いて、Exametrika（Shojima, 2007）による潜在ランクの分析を行なったところ、順序配置条件を満たし、充分高い適合度指標を得（ $RMSEA=0.00$ ， $CFI=1.00$ ， $TLI=1.00$ ），3群のランクを採用した。得られた項目参照プロファイルを

Table 1 各生活空間の私的 - 公的意識の人数分布の集計

	1	2	3	4	5	6	7	χ^2
1. 朝起きた自宅のベッドの中	368	22	2	7	2	1	1	***
2. 自分の部屋の中	301	67	18	9	3	2	4	***
3. 化粧をするための自分の部屋・洗面台	188	84	47	59	9	5	12	433.57 ***
4. 朝食をとる自宅リビング・居間	96	74	64	94	27	17	32	110.02 ***
5. 自宅の玄関	77	51	77	99	39	20	40	79.55 ***
6. 駅に向かう近所の道	3	4	17	31	51	55	242	***
7. 地元駅の構内・ホーム	3	3	2	9	20	23	343	***
8. 地元駅のトイレ	7	4	8	13	21	29	322	***
9. 毎日のように乗る通学電車の中	1	1	5	8	15	25	349	***
10. 学校最寄りの駅の構内・ホーム	2	0	3	6	21	28	344	***
11. 学校最寄りの駅のトイレ	7	4	7	9	24	31	322	***
12. 駅から学校までの道のり	3	2	4	25	33	54	282	***
13. 授業前の大学内	4	6	10	51	45	45	243	***
14. 大学内のトイレ	13	9	15	34	50	45	238	684.12 ***
15. 講義中の教室内	2	2	7	25	32	65	271	***
16. 学食で友人と食事をするために着いた テーブル	20	23	39	68	59	58	137	162.38 ***
17. 図書館の休憩スペース	13	21	35	60	44	48	183	343.89 ***
18. 友人と入ったファミレスの自分たちの テーブル	20	29	48	64	59	57	126	122.38 ***
19. 自宅近所のコンビニの店内	3	3	14	36	54	52	241	***
20. 自分の車の中	211	95	48	28	6	2	13	***
21. 顔なじみの店員がいる行きつけのお店	7	32	61	88	77	41	98	111.51 ***
22. 旅行先で初めて乗る電車の中	3	2	2	10	14	42	330	***
23. 旅先でのホテルの宿泊部屋	64	69	51	75	34	22	89	57.65 ***
24. 旅先の観光施設 (お寺・水族館 etc.)	1	3	5	23	18	38	316	***

※ 数値は人数で、1 (完全に私的空間である) - 7 (完全に公的空間である)。ただしセル内に5以下の数値がある場合、フィッシャーの直接確率検定を用いたため χ^2 値は記載されない

*** $p < .001$

Table 2 迷惑行為の評価に対する男女別に見た平均値と標準偏差

	男性	女性	t
＜全くやったことがない ～ 日常的にやる・やっていた＞			
1. 香水くさい、酒臭いなどの臭害	1.27 (.65)	1.44 (.66)	-2.59 *
2. 大声で会話をしている	2.23 (1.03)	2.75 (.86)	-5.47 ***
3. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている	1.93 (1.04)	1.96 (1.09)	- .27
4. 電車内で化粧をしている	1.09 (.47)	1.99 (1.17)	-9.63 ***
5. 足を大きく広げて座ったり荷物を隣に置くなど、座席を一人で大きく占領している	1.99 (1.01)	1.86 (.91)	1.37
6. 携帯電話で話をする	1.85 (.99)	1.96 (.98)	-1.11
7. ドア開閉時に扉の間近に立っているにもかかわらずそこからどかない	1.63 (.97)	1.87 (.95)	-2.47 *
8. 携帯電話でメールを打つ	3.91 (1.20)	4.62 (.78)	-7.13 ***
9. 隣の人の肩にもたれて眠っている	1.48 (.79)	1.70 (.83)	-2.66 **
10. 電車内で飲食をしている	2.25 (1.03)	2.65 (.97)	-4.00 ***
＜全く恥ずかしいとも格好悪いとも思わない ～ 極めて恥ずかしくて格好悪いと思う＞			
1. 香水くさい、酒臭いなどの臭害	3.97 (1.11)	3.93 (1.05)	.35
2. 大声で会話をしている	3.16 (1.13)	3.18 (1.06)	- .20
3. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている	3.34 (1.19)	3.23 (1.15)	1.00
4. 電車内で化粧をしている	3.90 (1.37)	3.78 (1.24)	.88
5. 足を大きく広げて座ったり荷物を隣に置くなど、座席を一人で大きく占領している	3.38 (1.21)	3.91 (1.04)	-4.70 ***
6. 携帯電話で話をする	3.42 (1.22)	3.57 (1.10)	-1.25
7. ドア開閉時に扉の間近に立っているにもかかわらずそこからどかない	3.64 (1.27)	3.37 (1.17)	2.18 *
8. 携帯電話でメールを打つ	1.58 (.81)	1.47 (.64)	1.50
9. 隣の人の肩にもたれて眠っている	3.37 (1.33)	3.58 (1.12)	-1.73 †
10. 電車内で飲食をしている	2.99 (1.24)	3.00 (1.10)	- .14
＜全く迷惑だと思わない ～ 極めて迷惑だと思う＞			
1. 香水くさい、酒臭いなどの臭害	4.22 (1.04)	4.35 (.80)	-1.40
2. 大声で会話をしている	3.81 (1.11)	3.78 (1.03)	.22
3. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている	3.65 (1.18)	3.56 (1.15)	.69
4. 電車内で化粧をしている	3.19 (1.49)	3.18 (1.29)	.12
5. 足を大きく広げて座ったり荷物を隣に置くなど、座席を一人で大きく占領している	3.95 (1.05)	4.36 (.83)	-4.36 ***
6. 携帯電話で話をする	3.62 (1.25)	3.72 (1.11)	- .82
7. ドア開閉時に扉の間近に立っているにもかかわらずそこからどかない	4.17 (1.07)	4.10 (1.04)	.65
8. 携帯電話でメールを打つ	1.56 (.94)	1.45 (.65)	1.37
9. 隣の人の肩にもたれて眠っている	3.56 (1.16)	3.73 (1.12)	-1.48
10. 電車内で飲食をしている	2.84 (1.21)	2.86 (1.13)	- .15

※ () 内は標準偏差

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 3 空間意識 (A) と迷惑行為の3側面 (B) に関する平均と標準偏差

		私的空間 意識傾向群 (N=130)	中間群 (N=143)	公的空間 意識傾向群 (N=131)		F
1. 香水くさい、酒くさいなどの臭害	実行程度	1.42 (.74)	1.31 (.56)	1.39 (.71)	A	2.31
	格好悪さ評価	3.00 (.99)	3.22 (1.03)	3.29 (1.21)	B	647.48***
	迷惑認知	3.52 (1.15)	3.69 (1.14)	3.77 (1.21)	A × B	1.54
2. 大声で会話をしている	実行程度	2.64 (.98)	2.46 (.91)	2.45 (1.02)	A	1.96
	格好悪さ評価	3.53 (1.18)	3.64 (1.11)	3.86 (1.14)	B	144.14***
	迷惑認知	3.49 (1.20)	3.52 (1.18)	3.74 (1.11)	A × B	2.21 †
3. 聞いている音楽がイヤホンから漏れている	実行程度	2.05 (1.16)	1.96 (1.04)	1.85 (.97)	A	.72
	格好悪さ評価	3.43 (1.21)	3.44 (1.21)	3.60 (1.23)	B	249.80***
	迷惑認知	3.49 (1.20)	3.52 (1.18)	3.74 (1.11)	A × B	1.47
4. 電車内で化粧をしている	実行程度	1.73 (1.11)	1.52 (.95)	1.53 (1.02)	A	.114
	格好悪さ評価	1.47 (.79)	1.56 (.64)	1.51 (.73)	B	714.05***
	迷惑認知	3.67 (1.06)	3.77 (1.06)	3.90 (1.07)	A × B	2.02 †
5. 足を大きく広げて座ったり荷物を隣に置くなど、座席を一人で大きく占領している	実行程度	1.97 (.95)	1.96 (.90)	1.81 (1.02)	A	.89
	格好悪さ評価	3.40 (1.06)	3.49 (1.20)	3.63 (1.19)	B	171.66***
	迷惑認知	3.32 (1.67)	3.51 (1.79)	3.60 (2.01)	A × B	1.06
6. 携帯電話で話をする	実行程度	2.05 (1.05)	1.88 (.93)	1.82 (.98)	A	1.71
	格好悪さ評価	3.71 (1.05)	4.09 (1.06)	4.02 (1.09)	B	728.09***
	迷惑認知	1.43 (.79)	1.56 (.78)	1.50 (.79)	A × B	3.50**
7. ドア開閉時に扉の間近に立っているにもかかわらず、そこからどかない	実行程度	1.88 (1.06)	1.81 (.95)	1.62 (.88)	A	.54
	格好悪さ評価	3.39 (1.13)	3.57 (1.22)	3.47 (1.29)	B	258.42***
	迷惑認知	2.63 (1.10)	2.90 (1.14)	3.02 (1.22)	A × B	3.04*
8. 携帯電話でメールを打つ	実行程度	4.38 (1.02)	4.24 (1.04)	4.27 (1.14)	A	2.25
	格好悪さ評価	3.65 (1.26)	3.83 (1.23)	3.99 (1.38)	B	18.67***
	迷惑認知	3.90 (1.12)	4.34 (.92)	4.12 (1.09)	A × B	3.25*
9. 隣の人の肩にもたれて眠っている	実行程度	1.67 (.87)	1.63 (.83)	1.52 (.76)	A	1.35
	格好悪さ評価	2.85 (1.06)	3.01 (1.15)	3.13 (1.24)	B	796.81***
	迷惑認知	4.17 (.91)	4.38 (.89)	4.29 (.97)	A × B	1.97*
10. 電車内で飲食をしている	実行程度	2.54 (1.06)	2.45 (.96)	2.41 (1.00)	A	2.41 †
	格好悪さ評価	3.10 (1.22)	3.22 (1.09)	3.49 (1.12)	B	291.30***
	迷惑認知	4.04 (.98)	4.23 (.92)	4.30 (.95)	A × B	2.53*

※ () 内は標準偏差

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Figure 1 に表示する。ランク 1 はプライベート空間であるとの評価の傾向にある「私的空間意識傾向群 (N=130)」、ランク 2 は「中間群 (N=143)」、ランク 3 は公共空間であるとの評価の傾向にある「公的空間意識傾向群 (N=131)」と考えた。空間意識のランクを独立変数の一つとした。

潜在ランクごとに、空間24項目の空間意識評価平均得点を算出し、軸上に布置した (Figure 2)。

性差の検討 男女間の違いを見るため、迷惑行為10項目それぞれの実行程度・格好悪さ評価・迷惑認知の3つの合計30項目を従属変数、性差を独立変数とした対応の無いt検定を実施した (Table 2)。その結果いくつか差異が見られた。全体的な傾向として、実行程度は女性の方が高い傾向を示していた。格好悪さ評価については、座席の占有行為は女性の方が、ドア近辺で乗降の邪魔になる行為は男性の方が恥ずかしいと回答していた。迷惑認知については、座席の占有行為について女性の方が高い値を示していた。

空間意識が迷惑評価に及ぼす影響 迷惑行為10項目それぞれの、実行程度・格好悪さ評価・迷惑認知の3つの側面 (個人内要因) と空間意識の潜在ランク (個人間要因) による2要因分散分析を実施した (Table 3)。その結果、空間意識については「10. 電車内で飲食している」の項目のみ、主効果の傾向があった ($F(2, 390)=2.41 p<.10$)。迷惑行為の実行程度・格好悪さ評価・迷惑認知の個人内要因については、全ての項目において有意な主効果が見られた。項目1・3・5以外の7項目で、迷惑行為の3つの側面と空間意識との有意な交互作用が見出された。

【考察】

本研究では、空間意識が迷惑行為の評価に

及ぼす影響について検討した。

まずTable 1の人数分布より、人数のばらつきが天井効果や床効果を示さず、極端に偏っていないのは、「5. 自宅の玄関」と「23. 旅先でのホテルの宿泊部屋」の二つであった。これ以外の場所は、私的空間か公的空間のどちらかへの偏りが見られた。しかしながら、多くが私的 (または公的) 空間だと評価している中でも、ごく少数ではあるが異なった (もしくは逆に) 評価している者がいることをも示している。一般に、多くの人が行うような行為であれば、多くの人が自らの行為を迷惑だと思うことは考えられないため、迷惑と認知される確率は低下する。また、圧倒的多数が私的空間だと思ふような場所を、公的な空間だと評価する少数者は、そもそも私的空間でもある種の公共心を抱きながら生活をしていると予測される。このため、他者が非難するような迷惑行為を積極的に行う少数派とは見なしにくい。このように考えると、電車内で化粧をするようなケースは、多くの人が公的空間であると認識しているにも関わらず、それを私的な空間と評価する少数者によると推定される。この分布から推測する限り、公的空間意識が低く、迷惑行為に対する抵抗が低いのはごく少数である。迷惑行為の実行程度において、全体的な傾向として、7件法で回答を求めた中で、多くの項目の平均値が男女とも2.0以下であり、実行程度は高くない。この点からも、迷惑行為をするのが公的空間であると認識しているにも関わらず、それを私的な空間と評価する少数者であることの傍証であろう。従って、マスコミなどが「ジコ虫」などと広告で訴えることで、実態よりも乖離した多数の逸脱者が存在すると謝って認知させてしまっている可能性があろう。

性差について、まず迷惑行為の実際の実行程度では、「2. 大声で会話をしている」など、

7つの行為について有意差が見られたが、いずれも女性の方が、行為の実行程度を高く評価していた。北折・吉田(2000)では、赤信号を無視して渡ってしまう歩行者は、比率として圧倒的に男性の方が多かった。多くの社会的ルール違反は一般に、男性の方が逸脱傾向を示すと指摘されるが、本研究は逆の結果となった。これは、幾つかの迷惑行為が女性特有の項目であった点が原因であると考えられる。例えば「4. 電車内で化粧をしている」は、明らかに女性特有の行為であると考えられ、実際に男性の実行程度の平均値は1.09(.47)と床効果を示している。このほか「大声でおしゃべりする」なども、どちらかといえば女性の方が顕著に私語をする(北折・太田, 2011)ことが予測される。また、「6. 携帯電話で話をする」については、特に電車を私的空間だと評価している男性において、格好悪さ評価や迷惑認知が低い値となっており、この群が電車内での携帯による会話を行っていることが示唆された。なお、携帯電話については、電磁波がペースメーカーに及ぼす影響があるにも関わらず、メールの使用についてはほとんど迷惑と評価されなかった北折(2008a)と同様、本調査においても、メール使用について迷惑とは評価されていない床効果が示されたとともに、空間意識に関係なく実行程度が高い値となった。

空間意識の潜在ランクと迷惑行為の3側面との関連において、3側面の有意な主効果が全ての項目について見られた。格好悪さ評価や迷惑認知評価が高い項目ほど、実行程度は低いということである。格好悪いとか迷惑であるという個人の認知を高めることが、行為の抑止には大きな効果をもたらすことを意味する(北折, 2008b)。例えば、暴走族を珍走団やダサイ族と辱める形で呼称することで、暴走行為を抑止するような手法が用いられた

ことがある(琉球新報, 2009)。多くの迷惑行為は、粋がって煽動する少数逸脱者が全体を攪乱するという構図が成り立っており、少数逸脱者はこうした煽動行為を格好良いと認知しているケースは多い(菅原・永房・佐々木・藤澤・薊, 2006)。この思い込みをくじくことは、自発的に煽動行為を辞めさせる上で効果をもたらすと考えられ、今後様々な分野における研究成果が待たれる。

交互作用が見られた項目について、私的空間意識傾向群(潜在ランク1)においては、実行程度が高く、格好悪さ評価・迷惑認知評価が低いのに対し、中間群(潜在ランク2)や公的空間意識傾向群(潜在ランク3)においては、実行程度が低く、格好悪さ評価・迷惑認知評価が高い。特に私的空間意識傾向群と公的空間意識傾向群における差異が顕著な項目が複数見られた。空間意識が迷惑認知や実行程度に影響を及ぼすことが確認できたのは、本研究で得られた成果といえよう。

最後に、本調査の問題点をまとめる。一つの迷惑行為について、実行程度・格好悪さ評価・迷惑認知評価の3つの側面で評定することから、10種類の迷惑行為を抽出し、その迷惑行為についての検討にとどまった。実際には、様々な迷惑行為が存在し、それは電車内に限らない。また、公共場面だけでなく、例えば二者間の友人関係における迷惑行為など多岐にわたる。私的関係における迷惑行為に対し、空間意識が影響するとは考えにくく、本調査の成果は抑止策にはつながらない。一部分に限られた質問紙調査の限界であり、知見をそのまま一般的な社会規範からの逸脱行動などに応用することは適切とはいえない。こうした事実を精査しながら、今後より妥当性の高い研究を継続していきたいと考える。より効果的な迷惑行為抑止策を考えていくことは、尽きることのない課題であろう。

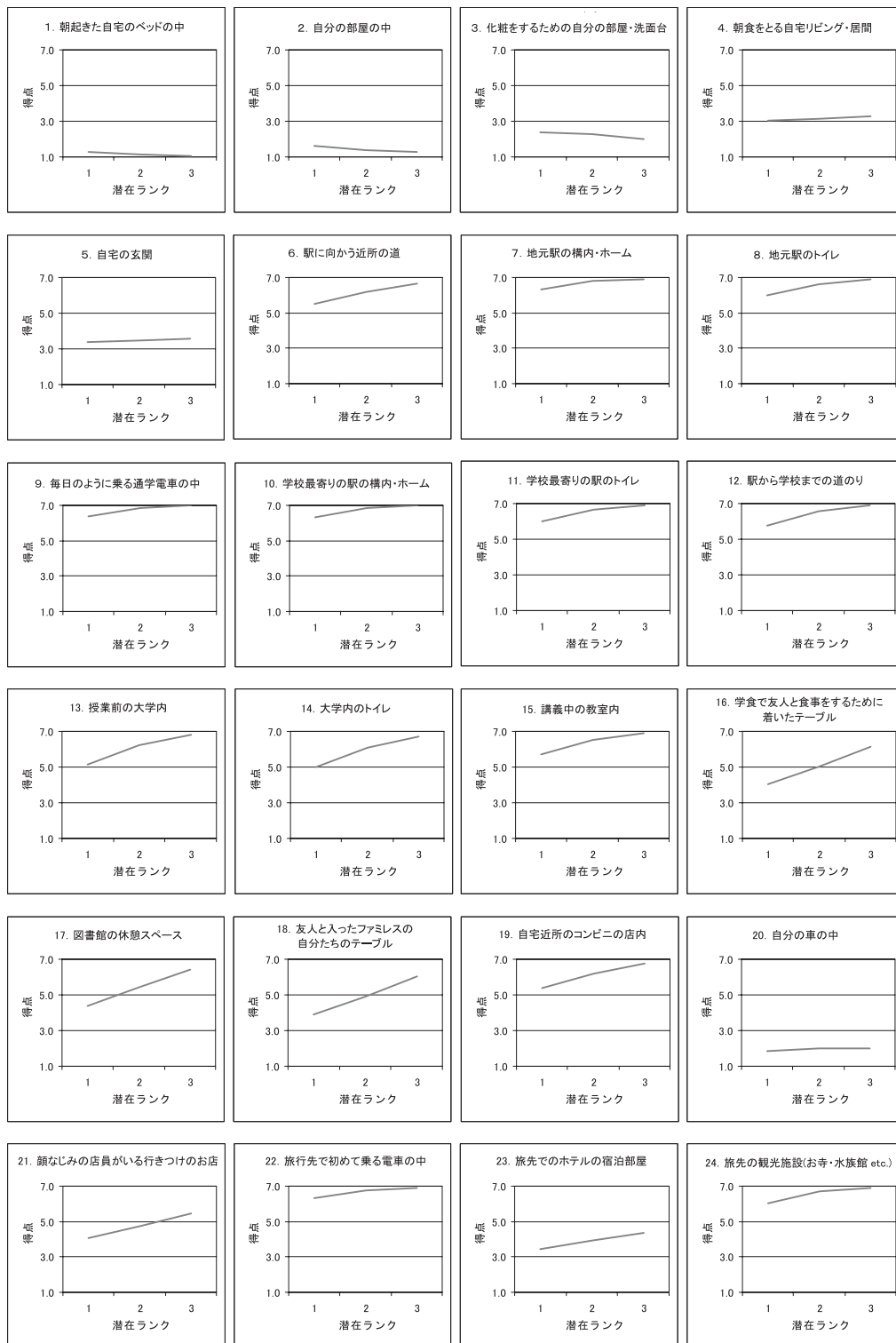


Figure 1 潜在ランク理論による分析で得られた項目参照プロファイル

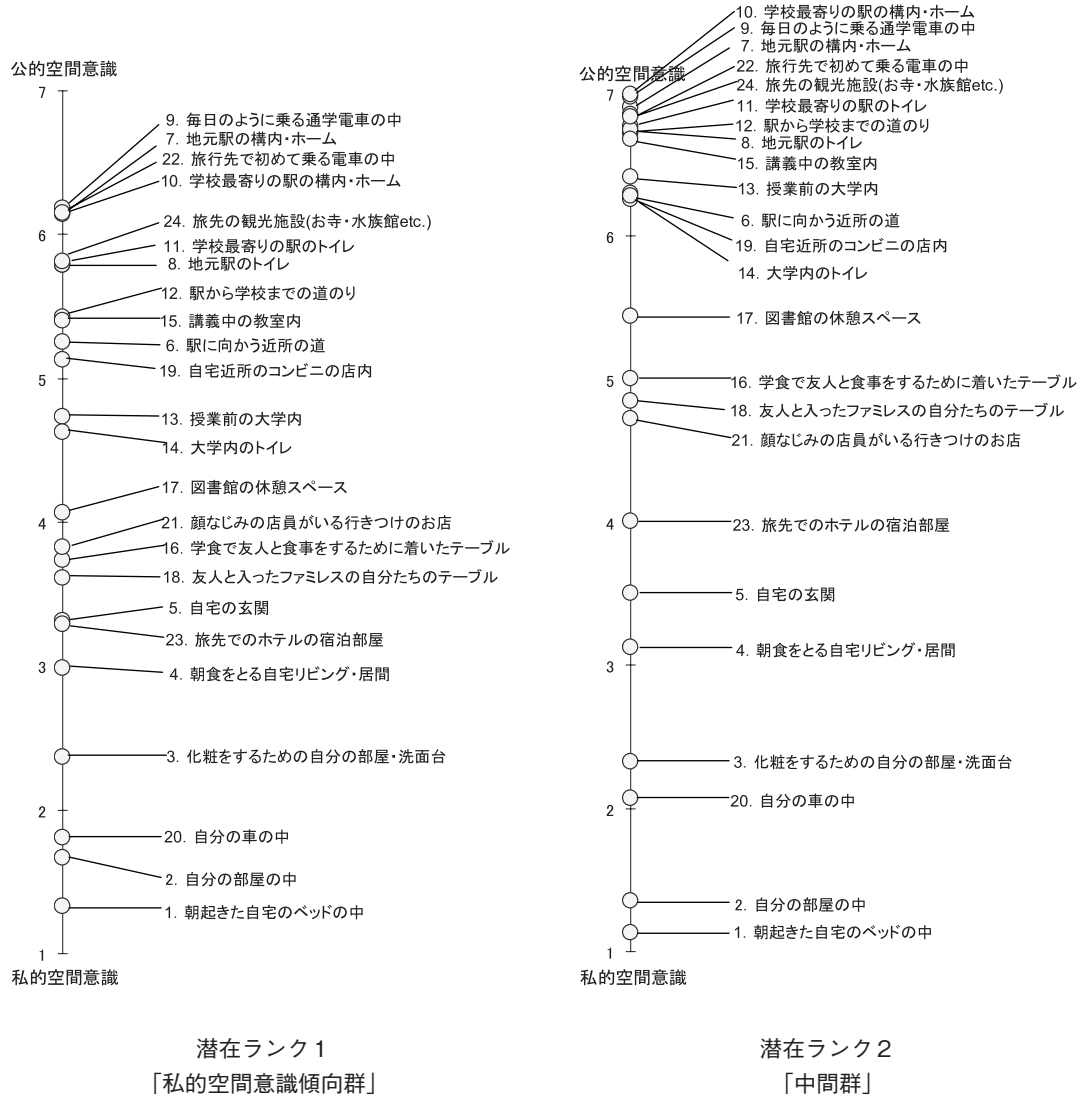
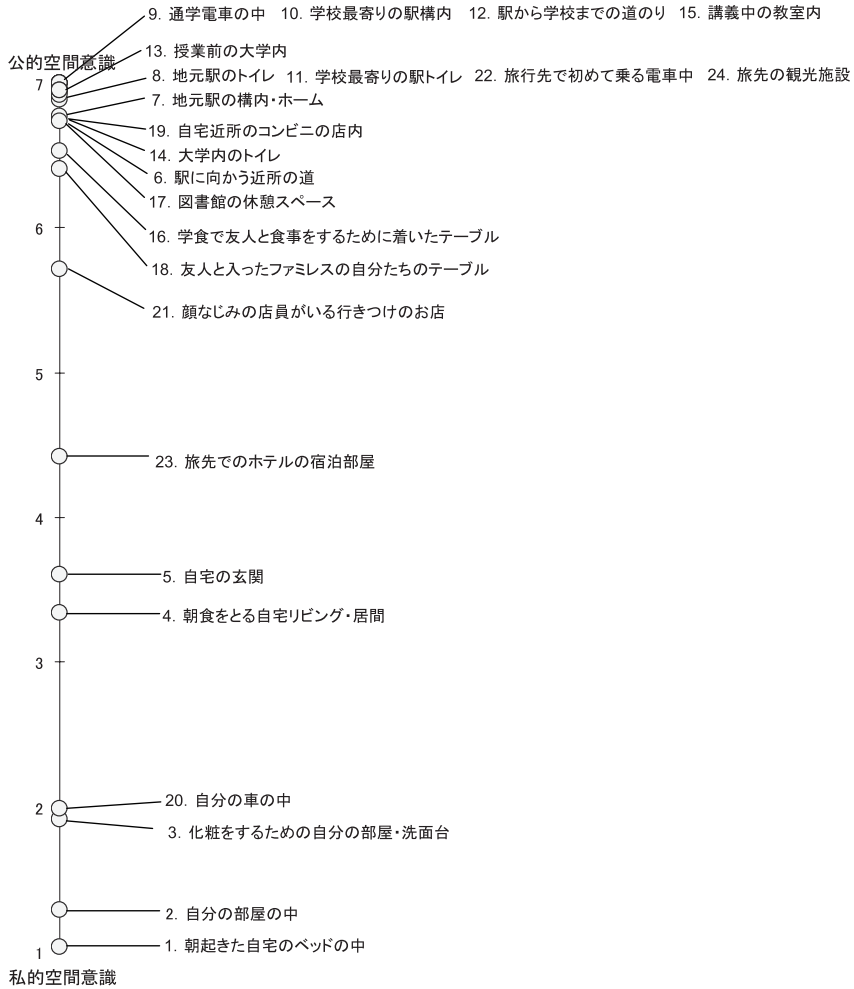


Figure 2 潜在ランクごとの空間24項目に対する空間意識評価のプロファイル



潜在ランク3
「公的空間意識傾向群」

【引用文献】

- Cialdini, R. B. (1988). *Influence: Science and practice*. Scott, Foresman and Company. (社会行動研究会 (訳) (1991). 影響力の武器 -なぜ人は動かされるのか- 誠信書房)
- Dymond, R. F. (1948). A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, **12**, 127-133.
- Humphrey, J. A. (2006). *Deviant Behavior*. New Jersey: Pearson Prentice-Hall.
- 北折充隆 (2008a). “電車内の迷惑行為評価に関する検討 -悪質行為はKYか?-” 金城学院大学論集 (人文科学編), **5**, 16-26.
- 北折充隆 (2008b). ルール違反を抑止するメッセージとは 教育と医学 **56**, 28-35.
- 北折充隆・太田伸幸 (2011). 講義中の私語抑制対策に関する効果測定 -座席指定とTAによる見回り実施に対するFD評価項目の比較検討- 東海心理学研究 **5**.
- 北折充隆・吉田俊和 (2000). 記述的規範が歩行者の信号無視行動におよぼす影響 社会心理学研究 **16**, 73-82.
- 北折充隆・吉田俊和 (2004). 歩行者の信号無視行動に関する観察的検討 -急ぎ要因と慣れ要因の影響について- 社会心理学研究 **19**, 234-240.
- 小池はるか・吉田俊和 (2005). 对人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連-受け手の関係性についての検討-, 東海心理学研究, **1**, 3-12.
- Koike, H., & Yoshida, T. (2006). The relationships between frequency of occurrence, perception of degree of annoyance, empathy, and social consideration. Poster session presented at the 26th International Congress of Applied Psychology, Athens, Greece.
- 松田美佐 (2002). ケータイとうわさ 岡田朋之・松田美佐 (編) ケータイ学入門 有斐閣
- Moriarty, T. D. (1974). Role of stigma in the experience of deviance. *Journal of personality and social psychology*, **29**, 849-855.
- 森久美子・石田 靖彦 (2001). 迷惑の生成と受容に関する基礎的研究--普及期の携帯電話マナーに関する言説分析 愛知淑徳大学論集, コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科篇 **1**, 77-92.
- 琉球新報 (2009). 暴走族は「ダサイ族」 宜野湾署命名, イメージダウン狙う 2009年6月1日付
- Shojima, K. (2007). Neural test theory. DNC Research Note, 07-02.
- Stotland, E. (1969). Exploratory investigation of empathy. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. Vol.4. New York: Academic Press. pp.271-314.
- 菅原健介・永房典之・佐々木淳・藤澤文・薊理津子 (2006). 青少年の迷惑行為と羞恥心 -公共場面における5つの行動基準との関連性- 聖心女子大学論叢, **107**, 57-77.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 **46**, 53-73.
- 吉田俊和・元吉忠寛・北折充隆 (2000). 社会的迷惑に関する研究 (3) -社会考慮・信頼感による人の分類と社会認識・迷惑対処方略の関連- 名古屋大学教育発達科学研究科紀要 (心理学) **47**, 35-45.
- 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆 (編) (2009). 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版

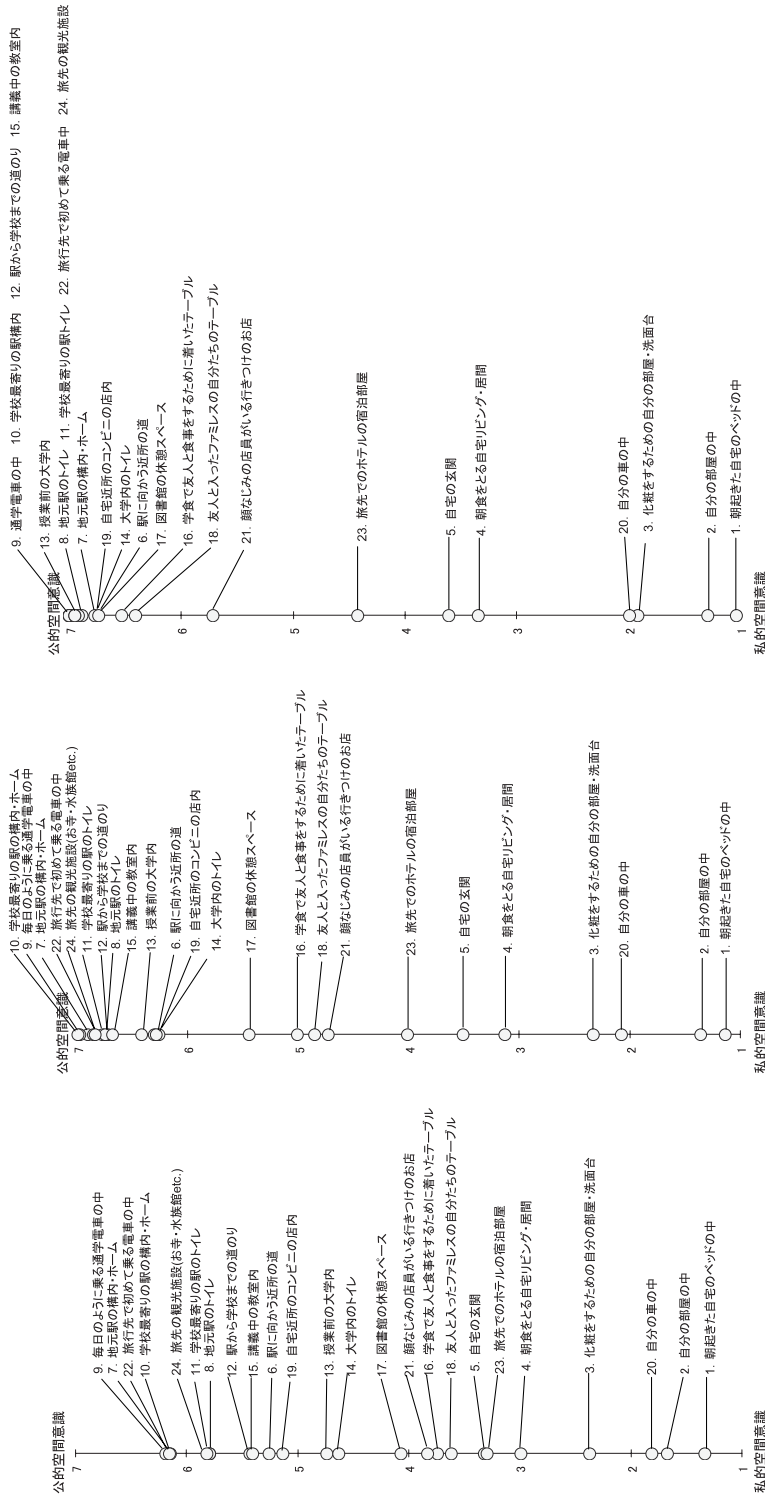


Figure 2 潜在ランクごとの空間24項目に対する空間意識評価のプロファイル